

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ムシウタのかっこうとレイディ・バードをsrwz に転生させてみた

【作者名】

rebo

【あらすじ】

もし、かっこうが大喰いを倒した後にこれまでの戦いの影響で死んでしまい、レイディ・バードもミミックに身体を直ぐに返し死んで前世の記憶を持ったまま転生したら

プロローグ

「うおおおおー」

少年の雄叫びが時空震動の中で響いている。相對しているのは姿はハッキリと視えないが微笑んでいる天使のような存在。

「」

天使のような存在は、雄叫びを上げながら自分を襲ってくる少年に驚いている。その様子はまるで自分の予想外の状況に楽しんでいるようだ。

異様なのは天使のような存在だけではない。少年の腕には虫のようなものが腕と同化している。それでいて少年の秀囲気からか恐ろしく感じる。

「」

天使のような存在が何かを話した途端、時空震動は終わり天使のような存在と少年は引き離された。

「くそっ！ー」は何処だ!?

少年は時空震動で跳ばされたところで周りを確認する。少年の近くには父親と姉、そして兄がいた。周りは家に囲まれている。どうやら住宅街に時空震動で跳ばされたらしい。

(場所は何処かの家の人に聞けばいいな。それよりも、あいつが何かを呟いた途端に時空震動が終わったな。もしかしたら、この時空震動も奴のせいか?)

「かっしっ……?」

少年はその言葉に声をした方に驚愕した表情で向いた。当然だその名前は前世でよばれた自分の異名だからだ。そして、自分もその少女を見て一つの名前が浮かんだ

「レイディ・バード……?」

「大丈夫か莉奈!」

別の場所でも時空震動の影響は受けていた。といっても影響はほとんどなく、ただの地震程度で終わっているようだ。

「ちょっと他のところで影響ないか軽く調べてくるわ」

「ああ。ほんとに軽くでいいのよ。早く帰って来なさい」

娘の言葉に母親は軽く返す。

「いつものことだけど。今日も直ぐに帰ってくるのよ。それに何か

あつたら直ぐに連絡するから、それで助かった人たちもいるから頭ごなしに否定できないし」

「あはは」

どうやら莉奈と言う少女は責任感が強くいつも人助けをしているらしい。

「大丈夫！行ってくるわね」

「あっ莉奈！」

(さてと、そろそろ帰るか)

親との約束通りに軽く町を調べて帰り道に進む莉奈。そこでその少年を見つけたのは偶然か必然か。その少年を見た途端、前世で因縁のあつた名前を呼んだ。

「かっしゅ……？」

そして少年もまた、自分の前世での異名を呼んだ。

「レイディ・バード……？」

お互いに自分の前世異名に戸惑っていたが、互いの状況に話し合っ

「俺たちはブリタニアの山奥で住んでいたが家族ごとさっきの時空震

動で跳ばされたんだ」

「そつ。わたしは普通の家庭で一般人として生きてきたわ」

莉奈は大助に背を向ける。

「取り敢えず、うちに来なさい。どちらにせよ泊まるところなんて無いでしょう」

莉奈の言葉に大助は素直に従った。

「助かる」

1話

(時空震動でこの町に跳ばされたあの日、確かにテンシのような存在とダイスケは戦っていた。俺は結局、ダイスケのことは何も知らない……)

「カミシロ君！この後、クラスの皆でカラオケ行かない？クラスでの親睦会も兼ねてさ。それにこの町に来たばかりだから町の案内もしてあげるよ」

「すまない。今日、バイトの面接があるんだ」

考え事をしている中、クラスメイトの女子たちからカラオケに誘われている。普段なら参加しても良かったが用事があるので断るようだ。

「そっか。それならしょうがないね。また今度、誘うから参加してね」

「ありがとう」

ヒビキ・カミシロは礼を言って帰宅した。

「うーん。ちょっと付き合い悪いわよね彼」

ヒビキがクラスから出て帰宅しているところを見て残っていた女子。千鳥かなめと詩織、恭子が話し合っていた。

「でも、愛想は良いし。それも泊まらせてくれる家の家計のためにバイトをしているらしいから、しょうがないんじゃないかな」

「帰国子女で苦学生か。大変ね」

「かなめちゃん。流石、クラス委員。面倒見がいいね。それともホレちゃったとか？」

「違うわよ。タイプじゃないし。それにそれを言うなら彼の双子の弟君と莉奈ちゃんじゃない」

「だよね！本人たちは否定しているけどすごく仲が良いし！あんな感情的になる莉奈ちゃん彼以外で見ないもん！」

「彼も偶にだけ辛辣な言葉は莉奈ちゃんにしか言わないもんね！」

「それで一緒にいるんだもん。絶対付き合ってるわよ！」

年頃の女の子らしくコイバナに熱中している。そこに一人の女性が近づいている。服装からして教師だろう。それにしても教師にしてはあまりにも若い女性だ。

「ちょっといいかしら」

「どうしたんですか？西条先生」

「スズネでいいわよ。西条先生なんて、この学校ではかなりの数の教師がいるし。あっ！でも先生はちゃんと付けないとダメよ」

「はい」「うん！」「うはは！当然！」

会話からして付き合いやすい教師のようだ。ちなみに先程話していたヒビキの弟と莉奈の入っているオカルト研究部に仮の顧問としても付き合いがある。

「でもスズネ先生凄いですよね。大学でも僅かの人にしか選ばれない特別教育実習生に選ばれているんだし。オカルト研究部の顧問もできていますから。」

「そうでもないわよ。もともとダイスケ君は考古学については私が教わりたいぐらい知識があるし、莉奈ちゃんも独自の表現ができる画力をもっているもの」

ヒビキの弟であるダイスケは考古学に詳しく、彼女とされている莉奈は画力があるようだ。

「それでヒビキ君、いないかしら。ちょっと聞きたいこととバイトの申請書で話が有ったんだけど」

「先程、教室から帰っていききましたよ」

「今なら、間に合つと思いますけど」

「そうね。ちょっと行ってみる」

スズネはそう言って、教室から出ていく。

学校の玄関まで行くと、ヒビキの姿が見えた。スズネはヒビキの姿を見ると呼びながら近づいて行った。

「先生!?!」

「ヒビキ君、バイトの申請書。忘れちゃダメよ」

呼ばれて近付いて来たヒビキにバイトの申請書を渡しながらスズ

ネは注意をしている。

「わざわざ、ありがとうございます」

「よろしいー！それと聞きたいことがあるんだけど……」

スズネの言葉の最中、時空震動が起こった。そして、黒い球体のような何かがヒビキに吸い込まれた。！

「ぐっー」

瞬間、ヒビキの瞳にはビルが崩れ、生気が感じられない世界に移った。まるで絶望の世界のようだ。

「カミシロ君！カミシロ君！」

「先生……？」

「大丈夫！気を失っていたみたいだけど……」

（なんだ!? さっきの頭に移った映像は……。一体何が起きている!?）

先程の時空震動で謎の機体も現れており、街を襲っている。

「先生は避難してください」

「え……ええ。カミシロ君は？」

「…俺は行きます！」

ヒビキの目は片目が血に塗られたように赤く染まっており、謎の口ポットの方向に走って行った。

そして、そこから離れたところに二人の男女がいた。来ている服装からしてヒビキたちと同じ学校の生徒だろう。男の方はヒビキと同じように血に塗られたような赤い目をしている。ヒビキと違う点があるとするれば、ヒビキが片目なのに対し、男は両目が赤くなっていた。

「で、なんでここに来たのよ」

片方の女が男に問いかける。

「ここに来いと言われたからだと言ったはずだ。だいたい、何でついてくるんだお前は」

男は女の質問に辛辣に返す。言われた女はその言葉に苛立ったのか先程より攻撃的な口調になり、男と言い合いを始める。

だが突然、男の言葉が止まった。女も突然止まったのに不思議に思いう言葉を止める。

瞬間。

「約束通り来てくれたんだね」

黒ずくめの青年が現われた。

「君に僕を使ってもらいたい。どついう意味かはすぐに理解する」

「ちょっと！待ちなさい、どういう意味よ！」

「言ったるう。すぐに理解ると」

女の戸惑いの声に青年は微笑みながら応え、その姿が薄れていった。後に残ったのは二人の男女と先程まで存在しなかつた黒い機体があつた。

「付喪神みたいなものか」

男は呆れながらの呟きに女は納得した。

「って！あんた、戦うつもりじゃないでしょうね！」

「当然」

「ふざけないで！戦うなら私も乗せなさい！わざと悪意を買っていきそつだから監視させてもらつわ！」

「ふざけんな！バカ女！」

同時にヒビキが機体の名前を呼んでいた。

「来い！ジェニオン！」

ジェニオンが現われた途端、また時空震動がジェニオンを中心に起こつた。いや、もしかしたら時空震動ではないかもしれない。何故な

ら、中心のジェニオンがダブっていくからだ。そして、終わったころにはジェニオンはももとの青色の機体と黒く染まった機体が出現していた。そして黒く染まっているジェニオンは何処かへと立ち去った。

「一体、何が起こったんだ。まあ、良い。街を襲っているこいつらを倒す！」

ヒビキが青いジェニオンで倒し、敵の援軍が来た。が、それも味方の援軍で倒し終わったころ黒いジェニオンは二人の男女のところに来ていた。

「取り敢えず、あたしが今来た機体に乗ることにするから。あんたはそれに乗りなさい」

「そうだな」

二人の男女は呆れた様子で二機の機体を見ていた。

「取り敢えず、機体を粒子化でもさせるぞ」

「そうね」

どつやら二機とも粒子化させることが可能らしく、隠すことも持ち運びもお手軽のようだ。

2話

「二人とも、珍しいな。デートでもしてたか」

二人の男女が家に帰るなり、ヒビキが開口一番にそんなことを聞いていた。更に、その言葉を聞いた女の方の母親がテンション高く問い詰めてくる。

「本当に!? ようやく付き合っているのを認めるのね! 今日はご馳走よ
」!

ヒビキがいることから予想できるだろうが、二人は男の方はヒビキの双子の弟のダイスケである。女の方はこの家の娘の莉奈である。莉奈は付き合っている発言に顔を赤くして否定してる。怒っているように見えるが母親には照れ隠しの様に見えるらしい。ちなみにダイスケは呆れた顔で否定している。

「毎回否定しているけどー! こいつとはそんなんじゃないからー!」

「嫌いなのか?」

「当たり前でしょー! こんな奴!」

「あら。じゃあ、誰かにとられるかもね」

そこでヒビキとダイスケの会話に聞こえる。まるで莉奈に聞かせるようなタイミングだった。

「そういえばダイスケの連絡先を女子に結構聞かれたりしたな。教えても良いか?」

「別にいいけど」

「なっ！ダメよ！」

ダイスケの言葉を否定する莉奈。あまりの速さにヒビキと母親はニヤニヤしている。

「お前には関係ないだろうが。それとも嫉妬か」

「うっさいー」

莉奈は鞆を投げて部屋に戻って行った。

「否定しませんでしたね」

「否定しなかったわね」

ヒビキと母親は顔を見合わせて笑い、ダイスケは冗談に決まってるのにと鞆をぶつけられたことで不機嫌になっていた。

「かなちゃん、昨日のニュース見た？」

「当然。陣代高校も移ってたもん」

千鳥と恭子が話していると途中、ざわめきが起こった。ざわめきが起こっている方向を見ると言い合いをしながらダイスケと莉奈が腕を組んでいた。近くにいたヒビキは二人を見て笑いを抑えている。

(わ…わかりやすすぎる…！)

どつやら莉奈は昨日の話を聞いて嫉妬しているようだ。言い合っているのは照れ隠しもあるのだろう。

「やっぱり付き合ってるんじゃないの？」

「だよな。でも会ったのは最近だから今日から付き合うことになったんじゃない」

「それもそうね」

腕を組んでいる二人に教師が近づいていく。

「別に付き合っちゃダメとか言わないけど、目に余るからそれは止めたよ」

「そうですね。そろそろ話してくれよ」

「嫌よ」

上目遣いで否定する莉奈。それでも恥ずかしいから、歩みにくいからと願うするダイスケ。

「好きなのはわかったから学校では止めなさい」

「そ……そうだ…そうだぞ」

笑いを抑えながらヒビキと呆れた教師の説得でようやく離れた。莉奈には女性教師の説教が続いている。ダイスケは直ぐに従おうとしたから無いようだ。

「いい、莉奈ちゃん。付き合っているからって学校でもイチャついちゃダメよ」

「すみません」

莉奈は顔を赤くして謝っている。周りの生徒はダイスケが羨ましいと思ってしまうほどの可愛さだった。ヒビキは昨日の話した内容で告白したことに考え付いて更に笑いが止められなくなっていった。ついでにヒビキの笑いを堪えている姿を見て、此奴が付き合い始めた元凶かと理解していた。

「おはよう。二人とも付き合い始めたんだ」

そんな中、千鳥たちが近付いて来た。どうやら一緒に教室まで行くつもりようだ。昨日は放課後、二人ともいなかったが全員が同じクラスだ。

「ところで莉奈ちゃんはダイスケ君の何処が好きになったの？」

「あつ。わたしも興味ある」

「兄として俺もだ」

千鳥の質問に便乗する三人。周りの生徒も聞き耳を立てている。

「嫌いよ。殺したいほど嫌いで、夢が似ているから惹かれただけ」

殺気を伴う言葉に何人かの生徒が崩れ落ち、そうでない生徒も怯えていた。ダイスケは苦笑するだけ。だが、いつもより大人びた表情に見えた。

「夢は秘密だけどね」

莉奈のその言葉と笑顔に周りの生徒たちは先程のは偶然だろうと自分を納得させていた。

別の場所では一人の少年が驚愕の表情を浮かべていた。

莉奈の殺気に銃を抜こうとした瞬間、ダイスケの一瞬の殺気に銃も抜けなかった。自分の任務のために莉奈とダイスケを最大限に警戒するようだ。

「ぐっ。これがプロの技術科か……」

ヒビキはアマルガムとFBの残党との戦いの後、三機の機体に捕獲され連れていかれた。戦闘を見ていた二人はその様子を見ながら話している。

「ダイスケ。助けなくていいの」

「必要が無いだろ。このシュロウガじゃなかったら俺も向かっていた」

「正直に話せばいいじゃない」

「俺は自分が生き残ればいいんだよ。面倒がなくて楽し」

「1J6……」

途中からヒートアップして言い合いを始める二人。最終的には折り合いを見つけて合流することに決まった。

3話

「そういえば兄さん。最近遅い日が多いけど、どうしたんだよ」

学校へ向かう途中、ダイスケは兄であるヒビキに最近遅い理由を聞いていた。ヒビキがとある部隊に編入していることは知っているくせに白々しいことである。

そうとは当然だが知らないヒビキは軽く誤魔化すがいつか教えてくれればいいと言ったダイスケの言葉に甘えることにした。

「おはよー」

「死ね」

突然、後ろからピンクの髪の女性とがダイスケに突っ込んできた。ダイスケは後ろを向かずに躲し、殴ろうとするが莉奈に止められる。普段はヘタレと言っているダイスケの行動に普通は驚くが、周りの生徒はヒビキも含めいつものことかとスルーしている。

この少女はティティという。宗助のすぐ後に転校してきて、以前から会ったことのあるダイスケに何かと絡んできている。たまに過去の話をするなどんな話であれ、鬱になったりする少女でもある。そのため、ティティの前の生活は誰も知らないらしい。

ついでにダイスケが莉奈と付き合っていると知っても寝取る豪語したことで学内でも有名になった少女でもある。

「ひどいなー。せっかくいいこと教えてあげようと思ったのに」

「何の話？」

莉奈とはそれなりに仲が良いらしい。寝取れるなら寝取って見せろと言う感じだ。仲良く話しているのを聞くとまた、転校生が来るといふ話だった。

「またかよ」

ヒビキの思わず出たという言葉に同意するダイスケと莉奈。今年から編入してきたダイスケとヒビキでも三回は経験しているのだ。莉奈は今月で四回目、心底同意していた。

そして、ヒビキと宗助は転校生を見て驚いていた。ちなみにこの二人、妙に息があって今では親友となっている。転校してきたのは兜甲児や早乙女アルトたちだった。美形の転校生に女子は喜んだり、男子は彼女持ちの転校生に羨ましがっていた。

それでもまた転校生かと飽きていたのがほとんどだった。その反応に流石に不機嫌になる転校生たちだったが、今回で今月四回目の転校生だと聞いて納得した。流石に自分たちも何回も転校生が来たら飽きた反応になると思ったのだろうか。

「よっーお前ヒビキの弟なんだってなー！」

アルトがダイスケに話しかける。ヒビキの弟であるダイスケに興味を持っているようだ。今、意識がある唯一の家族だから大切にしているのが話の内容から分かっていたのだろう。他にも宗助から聞いていた殺気にも聞いていたのもあるせいだ。

「兄さんの知り合い？まあ良いや。どっせ」

「だろっし」

「えっ」

「何でもないよ。兄さんの知り合いならちよつどいいや。オカルト研究部に入ってくれないか。名前だけでもいいから」

ダイスケはアルトとの会話中、自分の所属している部活の勧誘をしている。そろそろ人数を集めないと廃部になるからだ。部活は最低でも六人は在籍する必要がある、今はダイスケと莉奈とティティしかない。ちなみにヒビキは”オカルト研究部じゃなくて考古学だろ!?”と突っ込んで在籍していない。他にも部隊に編入した理由があるからだ。ついでに顧問であるスズネもヒビキと同じ突込みをしていた。

「すまないな。ダイスケ、アルトもいろいろと事情があるんだ」

オカルト研究部とは名前だけの部活動の内容に思い出したヒビキは止めに入る。その後も名前だけでもいいからと言うダイスケにアルトは一度体験してみたら決めるかと答えを出した。実際には考古学をやっているのはヒビキとティティくらいで、莉奈は絵をオカルト中心の絵を描いたり三人で駄弁っていたりする。

ただティティを除いた二人がそれぞれ賞をもらっているのが原因で気後れしているだけだ。ちなみにダイスケは昔の生活や超常現象を調べていたり、滅んだ理由を調べている。ティティは過去の食べ物。莉奈は伝承に残ってある過去の風景や超常の存在を書いている。正直、名前ばかりで各々違うことをやっている状況だ。

それでも賞を貰えるぐらいだから何か間違えている。

「まあ頑張れ……」

そんなアルトにクラスの生徒たちは暖かい目で見ています。ヒビキにいたっては肩を叩いている。

「なんだか名前と違って大変そうな部活だな…」

「名前だけでもいいのに…」

周りの反応からのミシエルの感想にダイスケは暗い顔で呟いていました。

ダイスケは莉奈とティティと一緒に部活動に向かっていた。アルトも参加させるつもりだったが久しぶりの再会を優先させた方がいいと気を使ったようだ。

「アルト、部活には行かなくていいの？」

「ああ。久しぶりの再会だったら、そっちを優先していいと言われてな」

「へえ。いい奴じゃないか」

「だが俺は莉奈も含めて恐ろしく感じることもある」

「言っつな。…っっ」

アルトたちの会話に宗助の意見に同意しているヒビキ。あまり触れたくないことのようにだ。同時にテンシとの戦いを思い出しており

目が赤くなっている。

「どうしたヒビキ？」

「なんでもないさ」

一瞬だったため目が赤くなったことに気付かれていないようだ。宗助はならいいがとダイスケと莉奈の恐ろしいと感じたことを話している。

「そうなのか？」

「ああ。以前、莉奈と付き合っていることに不満な奴らがダイスケを呼び出した」

「なっ！マジかよー！」

「おいおい。そんなことをする奴がいるとは……。アルト、入部して守ってやったらどうだ」

「必要ないだろ」

甲児たちの反応に否定するヒビキ。それを見て怒りの反応を向けるが、宗助は肯定する。

「ああ。ヒビキの言う通りだ。俺でも視認できない速さでダイスケは十人以上の敵対者を病院送りにしていた。女もその中にいたのに容赦のなさに恐怖を感じた」

「」「」「」
「」「」「」

「女の子もいたのに全員病院送り？」

「肯定だ。ちなみに二度とこんなこともしない様に見せしめも行っていた」

宗助の言葉に絶句する甲児たち。

「やりかねない」

ヒビキの言葉に更に信憑性を持っていた。

「更に莉奈はその話を聞かせた報復させようとした仲間を叩いたようだ。どうも自分を出しにしてダイスケを襲った理由が気に食わなかったらしい。私のシアワセの邪魔をしないでという言葉聞いて学外も含め自殺騒動が絶え間なく続いたようだ」

更に絶句する甲児たち。今度はヒビキも含まれている。

「どうも自殺騒動を起こした者たちは全員、ダイスケを害そうとしていたようだ」

しばらく会話ができなかったがボロボロのブロッケン男爵が現われたことでそれどころではなくなっていた。

4話

「ようアルト、部活どうだったよ」

「色んな意味でキツイ」

アルトの脳裏では昨日のオカルト研究部の部活動を思い浮かべていた。

「莉奈。何を書いているんだ？」

「悪魔」

「へえ。見てもいいか」

「邪魔しないならいいわよ」

断りを入れて見た絵にはダイスケの横顔が書かれてあった。アルトも偶にしか見ない大人びた表情が書かれてあった。

「へえ。ダイスケの絵、上手いじゃないか」

「莉奈は凄いでしょ。部室にある絵は全部、莉奈作のなんだよ」

「何っ!？」

周りにはある絵は人物がの他に自然画、天使と悪魔が書かれていたり
と節操もない。

「なんとというか凄いな」

「だよーねー。ダイスケは勉強中だし私も今日は資料を纏めるだけだから暇なんだよね」

そう言っておしゃべりを続けるティティ。アルトはティティは何の資料を纏めているか聞いてみる。

「昔の人生活とか食べ物についてだよ。昔は食べ物のバランスとか調べていると意外といろんなことがわかっておもしろいし、出来るだけ再現したの食べるのも楽しいよ」

「へえ。今度作ってくれよ」

「いいよ。でもちよっと暇だし抱き着いじつと」

「へっ?」

「えい!」

驚くアルトを尻目にティティはダイスケに抱き着いていた。読書に集中しているからか普通に抱き着かれているダイスケ。莉奈のところからペンの軋む音が聞こえてくる。ティティは莉奈に見せつけるようにさらに密着している。

「な...なあ。ダイスケは何を呼んでいるんだ?」

「母さんの論文」

「ふーん。なるほどね」

どじりっことか聞いてくるアルト。

「母さんは考古学と超次元科学を合わせて独自の考えを持ってある存在に感づいたせいで殺されたからんだよ。だからかなり興味あるんだ」

「殺されたって、大丈夫なのかよ！」

「大丈夫だよ！いざとなったら私が護るし」

そう言っただけに更に密着するティティ。更に莉奈の方からペンの軋む音が聞こえてくる。

「莉奈よりはスタイル良いし。私の方が付き合っただけ絶対楽しいよ！」

ペンの折れた音と一緒に莉奈が立ち上がった。アルトは徐々に悪くなっていった空気に顔を青くし始めていたが自分を誤魔化すこともできなくなっていた。そして恐る恐る莉奈の方を見て後悔した。

「ティティ。いい加減に離れなさい」

怒りで顔を真っ赤にした莉奈が高圧的な態度でティティに言うが、怖いと言うだけで更にダイスケに密着する。そして実力で引き離そうとしてキヤットファイトが始まった。

女性同士の本気の争いにアルトはドン引きし、ダイスケは普段通りの態度で資料を読んでいた。

「アルト。母親のことは兄さんに言わないでくれよ。トラウマになっ
てくるよ」

「この状況でそれかよー！」

あまりのダイスケの平静さにアルトはキレ気味に突っ込んでいた。

「あんなのじゃれ合いだから気にする必要は無い。本気を一度見たことがあるがこんなものじゃないし、本気を出したら流石に俺も介入する」

どう見ても超一流に匹敵する戦闘にあれでも本気じゃないと驚愕するアルト。

（ってあれがじゃれ合いって！毎日これをやっているのか!?!）

そのことに思い至ったアルトはこの部活に入るのは無理だと思った。

「来る前でも言ったけど名前だけでもいいから」

まるで心を読んだように言うダイスケ。するとティティがアルトの前に上目遣いで近付いて来た。

「名前だけでいいの。ダメ」

潤んだ目で見上げるティティまるでキスしようとする恋人のようだ。ちなみに莉奈はダイスケに後ろから抱きしめられて顔を真っ赤にしている。

「それは…」

顔を赤くしているアルトに写真の音が聞こえた。

「えっ」

「ティティ。もういいぞ」

「わかった。って莉奈ズルい！私も抱きしめてよ！」

「恋人でもないのになんでだよ」

いきなりの展開に着いていけないアルト。そのアルトにさっき携帯で撮った写真を見せるダイスケ。

「お前ほどの美形だ。これを仲間内やお前の彼女に渡されたくないなら名前だけでも部活に入るんだな」

「」

「この悪魔が……！」

あまりの内容に言葉が出ないアルトに代わって莉奈が悪態をつく。

「別に名前だけでもいいだろ。なんか引かれて入ってくれそうにないし」

「あー。私は楽しいからいいけど結構莉奈と喧嘩しているからね。莉奈の下僕は恐れ多いって入らないし。ダイスケは意外と恐れられているし。……ダイスケ、裏表激し過ぎじゃん」

「」

「はあ。悪いけど名前だけで来なくてもいいから入部お願いね」

「

「ホント、キツイ……」

「どつしたアルト……」

アルトの意気消沈ぶりにミシェルが思わず声を上げる。そしてヒビキがアルトの肩を叩き慰める。

「お前もか……。ヒビキ」

「ああ」

お互いの肩を叩きあい慰め合う二人。その光景でざわめきが起こってクラスメイトの一人に何があったか聞いた。

「オカルト」ああ……。そついで」と」

どつやら、同じクラスではダイスケの裏表の激しさというかドスッぷりや莉奈のカリスマやら周知の事実のようだった。そのことに納得したクラスメイトは自分たちの話に戻っていく。

「でよお。ハイキングがあるらしいけど当日はサボらないか」

ボスが話を切り替える意味も含めて、話を切り出した。めんどくさいから行きたくないらしい。甲児たちもサボりに乗り気だ。

「ヒビキはどつするんだ」

「俺は行く」とにする。同じ機体に乗っているからバレたら面倒だ。莉奈も一緒の家に住んでいるから問い詰めてくるだろうし」

「ビキの言葉に納得する一同。ついでに自分たちも善意で説教されそうて心が痛みそうだと同意する。

「そうだな。俺も行くことにしよう」

「マジかよ」

甲児の言葉にサボることに賛成していた仲間が減っていることに嘆いているようだ。もちろん宗介は千鳥の護衛のためハイキングに参加するようだ。

そんな中、莉奈とダイスケが教室に入って来た。莉奈はイラついた表情でダイスケはそんな莉奈を宥めている。

そんな二人に驚いているクラスメイトたちに安心させるようにビキが話しかける。

「私がダイスケと付き合っているのが気に食わないからとハイキングで罫を仕掛けてダイスケを襲撃するって聞いただけよ」

普通に大事だった。というかどこで聞いたのだろうか。そのことを聞くと。

「教室に着く前に誰も居ないはずの教室で人が集まっていたから盗み聞きをしたのよ」

「宗介。ダイスケを抑えるのに手伝ってくれ。また男女関わらず病院

送りにしかねない」

「了解した」

ヒビキの言葉に驚愕するクラスメイト達。

「前回みたいにナイフを持ってきたりしなきゃ、そこまでやるつもりはないんだけどな」

苦笑するダイスケに恐怖するクラスメイト達だった。

「こりゃ俺たちも参加しなきゃな」

「ああ」

「ですね」

5話

「ねえ。ダイスケ君、大丈夫なの？」

千鳥がヒビキたちに心配した声を掛ける。ダイスケを襲撃するという話は千鳥も聞いており心配のようだ。

「むしろ俺たちが気を付けないといけない」

よく見るとヒビキたちは体中ボロボロだ。

「どうしたのよ…。転校生組全員がボロボロなんだけど」

千鳥はヒビキどころか甲児たちやアルトたちですらボロボロになっているのを驚きを隠せないでいる。

「久しぶりにダイスケと組み手をしたんだが手も足も出なかった」

「まさか、あれほどは…。！」

「俺もまだまだな…」

「なんで安全対策したとはいえモデルガンの狙撃を避けれるんだ…」

話によるとダイスケは転校生組全員と組み手をし、全く相手にせずボロボロにしたらしい。最終的にはモデルガンとは狙撃もありでも足もせず、生身での戦闘に自信を失っているようだ。

「うはは…。ダイスケ君のフォロー必要ないんじゃない」

「あいつは転校前にしつこく暴力的にケンカ売ってきた奴は例外なく病院送りにしている」

「え……」

「しかも男女関係なくだ……」

「やばくない……！」

「ああ……。しかもそのたびに性格が歪んだりしている女の子を引っ掛けているから修羅場が良く起こる」

「うっわ」

つまりダイスケのフォローをするとは襲撃者を撃退するのではなくダイスケがやり過ぎないように監視するという意味であった。

「もうちょっと手加減しなさいよ！結局病院送りじゃない」

「ケンカ売って来たこいつらが悪いんじゃない！私としては久びりに暴れられて楽しくて満足！」

「あんたねえ……」

そこまで重い怪我はしていないが襲撃者たちは全員が捕獲されていた。ヒビキたちはダイスケ以外にもオカルト研究部の女子の実力に驚愕している。ダイスケは今回ほとんど何もしていない。喧嘩を買おうとしたら莉奈とティティに止められて見るだけだった。

「おい。喧嘩を売るならこねぐらいはできてからこい」

ダイスケは襲撃者たちに目の前にある樹を裏拳でへし折った。

「遅かったか…」

「兄さん。女同士の喧嘩止めるのメンドクサイ」

ヒビキたちが喧嘩をしていると聞いて駆けつけてきたようだ。既に終わっているが今度は女同士の争いに驚いている。

「いや、お前のせいだろ」

「今回ばかりは違う。俺は最後に樹をへし折っただけでケンカ売ってきた奴らを殴ってたのは今喧嘩しているアイツ等だ」

「ケンカしている理由はお前の奪い合いだろうに…」

「俺が好きなのは莉奈だ」

話が聞こえていたのかさらに激しくなる喧嘩。心なし莉奈の表情には優越感が浮かんでいる。

「ぐわあああ…！」

突然、悲鳴が聞こえた。

「うわっ。宗介か兄さん、もしかして罠でも作った？」

「まあ。確かに俺は作ったがまだ襲撃者居たのか…」

「ヒビキ君！さっさと罫を解除するのに手伝うから行くわよ！一般人が引つかかっていたら大変じゃない！」

「おもしろそー。私も行くね」

「待てや、バカども。取り敢えず、兄さんたちは行って来なよ。俺はちょっとこいつらに話あるから」

「あ…あぁ」

ヒビキが頷いて罫の方に行ってから、莉奈たちが何か聞いてくるのに対しマシンに乗ってテロリストが襲ってくるかと返すダイスケ。といより罫にかかった奴らがそのテロリストだと話すダイスケに呆れる二人。

「初めての機体に乗っての実戦だになるな」

「ふーん。今から出撃するの？」

「いや。襲ってくる奴らに援軍でも来そうだ。そいつらを狩る」

「確かにね」

そんな会話をしている最中にFBの襲撃をヒビキたちは返り討ちにしていった。

「ちて行くか」

「ええ」「あぁ…。これから楽しくなりそ

ダイスケはシュロウガと黒いジェニオンを呼び、莉奈はダイスケに

呼ばれた黒いジェニオンに乗り、ティティは巨獣の機体を呼び出し搭乗した。

「よっし。終了！宗介たちはハイキングを楽しんで来いよ！」

「待ってください！何者かが来ます！」

FBを退け宗介たちにハイキングを再開してくるよう催促するクルツの言葉に正太郎の警告をする。そして円盤型の機体と怪獣のような機体が時空震動で出現した。

その瞬間、三機の機体が出現しごとごとくを破壊していく。

「狩らせてもらっし」

「命を何とも思っていない奴なんかには負けるもんか！」

「くすくす。二人の実戦のいい経験になりなよ」

シュロウガのスピードで翻弄し、黒いジェニオンの狙撃で翻弄された機体を打ち抜いて行く。巨獣の機体は二機のフォローを少しだけ行っている。自分以外の二機のパイロットに経験を積ませることを目的にしているようだ。

「あの二機の黒い機体パイロットは片方は素人だが、もう片方はもう少しで一流に届きそうだな。それでも機体に振り回されているところがあるが。つつつか、まるつきり素人の方ヒビキのジェニオンと同じ機体じゃねえか！」

「そんなあり得ません！あれは私が知っている中で一機だけのはずです。試作型のため量産なんてされているはずはありません！」

黒いジェニオンを見てクルツは声を上げ、AGは動揺をしている。

「っっ」

「どうしたんだ。アルト？」

「すまん。あの速い機体を見ると頭痛がしたんだ！」

「アルトさんもですか!？」

「どうやら、かなりの人数が頭痛を起こしているみたいだね！」

シュロウガを見てかなりの人数が頭痛を起こしているようだ。その間に全てが片付いてしまい三機は直ぐにこの場から離脱した。

「あいつらいったい何者なんだ!？」

6話

「今回の戦闘では黒い機体たちは現われなかったな」

「ああ。頭痛の原因が俺たちの頭痛の原因が分かるかもしれないのかな」

「それにジェニオンそっくりの機体にも知りたい。AGもそれでうるさいしな」

ヒビキたちはネオ・ジオンの部隊との戦闘後いつものメンバーで話をしていた。話している内容はネオ・ジオンの動きやハイキングの最中に現れた黒い機体の話だ。話している内容はどちらかというとき黒い機体の方が中心になっている。

ZEUTHやZEXISに所属していた面子は頭痛がするシュロウガが気になっており、それ以外はジェニオンそっくりな機体が気になっている。AGは取り敢えず黒いジェニオンをジェニオン・Fと呼ぶつもりようだ。ちなみにFは偽物FAKEの意味らしい。

「まあ、明日は修学旅行だ。楽しもうぜ」

「ああ」

甲児の話の切り替えにヒビキは苦い顔で頷いている。

「どっしたんだよ、ヒビキ」

「甲児、俺たちは「コミ係だ」」

「結局、宗介の巻き添えを喰らったからな」

「そうだった」

折角の修学旅行でクラス全体のゴミ係に無理やりされたことを思い出すヒビキたち。

「問題ない」

「お前のせいだろうが！」

「なんでゴミ箱をひっくり返してまたいれるんだよ……」

宗介とヒビキの行動に千鳥たちの班は死んだ目をしている。

「兄さん何してるのね……」

「バツカじゃないの」

ダイスケと莉奈は冷たい目でヒビキと宗介を見る。甲児たちは死んだ目でゴミ拾いをしながらヒビキたちと一緒にいた。

（まさかヒビキまでゴミ箱にトラップがあることに肯定するとは……）

（ヒビキは山育ちと聞いたからな、意外と常識に疎いのかもしいれない……）

（マジかよ……）

(ああ。ダイスケ自身がそう言った。あと結構ボンクラらしい)

どうやら部活でダイスケからヒビキのことを聞いていたらしい。こんなところで、そんなところを發揮しないでほしかったところだ。

修学旅行の帰り道、ダイスケはヒビキに頼まれてバスに遅れて乗ることになった。どうやらヒビキは家族であるダイスケには秘密を打ち明ける気のような。なにせ自分だけがバイトをせずお金を住ませてもらっている家に渡せてないのだ。気にしなくていいと莉奈の母親は言ってくれているが素直に甘えれない。

まずはダイスケに説明して、その後に莉奈と莉奈の母親に教えるつもりだ。ちなみにジェフリー艦長たちにはそのことを伝えてあり協力してくれるようだ。その証拠にダイスケたちの前にマクロス・ウォーターがある。

「ダイスケ。俺はジェニオンという力を手に入れたんだ。この力で父さんと姉さんを殺したテンシを追う」

あの後、ダイスケたちの父と姉は死んだ。特にダイスケはそれを知った後には絶叫を上げて悲しんだ。テンシと相対し戦っておきながら父と姉を守れなかったことに絶望して一時期、血塗られた目が出て感情が無くってしまったことがあるほどだ。それでもダイスケが直ぐに復帰できたのは同じ夢を持つ莉奈のお蔭だろう。莉奈がいなかったらダイスケは今も血塗られた目の影響で感情がなく病院にいたままだったかもしれない。

「わかった。莉奈とおばさんには兄さんが言ってくれよ」

ダイスケはヒビキの意思に従うつもりのようにだ。ヒビキの目は強い意志を秘めており自分が何を言っても止めないと悟ったからだ。

「父さんや姉さん、母さんみたいに死なないでくれよ」

「ああ。わかってる」

ヒビキはダイスケが母親のことを話すと苦い顔で頷いた。それに気づかなかった甲児たちがダイスケに安心させるように会話に入ってくる。

「安心しろ。俺たちは破界事変や再世事変で戦ってきたんだ。いざとなればフォローするぞ」

「そういう事だ。いまからテロリストどもを撃退する任務に入る。よければ見てみるがいい」

甲児の言葉にジェフリーが乗り、ダイスケをマクロス・ウオーターに招待する。ダイスケもその誘いに乗った。

テロリストとの戦いは当たり前のように完勝していた。途中、ダンクーガノヴァが参戦したとと修学旅行の帰りの飛行機がハイジャックされたことを除けば想定道理の状況だった。

「ダイスケ君。すまないがこのマクロス・ウオーターに乗ってもらって構わないか」

ジェフリーはダイスケにクラスメイトが乗っている飛行機がハイ

ジャックされ、自分たちはこのまま救出に向かうことを伝えた。

ダイスケはそれなら自分に手伝えることはないか聞き、甲児たちに軽く自分の戦闘技術について教えた。ついでに生身での軽い模擬戦もし模擬戦に参加した相手に全勝していた。逆にシュミレーターでは一勝もできなかった。

7話

「なあ、ヒビキ。ダイスケとまた模擬戦してもらうことができないか？」

甲児は出撃に向かう途中、ヒビキに頼み事をしている。マクロス・ウォータが移動している間で身体を温めるためにダイスケと生身で模擬戦をしていたがまるで相手にならなかつたからだ。破界戦役から鍛えていた自分が手も足も出なかつたのにシヨックを受けたのだらう。

「おい！俺様も参加させてもらうぜ。あれだけ相手にされなかつたのは始めてだ。絶対、見返してヤルぜ」

ボスの言葉にそれぞれミスリルも含め何人も賛同する。ヒビキはあまりの賛同する声の多さに動揺している。

「それだけ、あいつとの模擬戦は得るものが多いということだ」

アルトはヒビキに皆がダイスケと模擬戦を挑む理由を簡単に説召する。

「本当に俺にはもつたない弟だ」

ヒビキはその言葉に笑顔で呟いた。

ちなみにこの会話はマクロス・ウォータのブリッジ全体に聞こえており、ダイスケはヒビキの発言に顔を赤くしていた。艦長を含めたクルーのメンバーは微笑ましいものを見る目でヒビキとダイスケを見

ている。

「すまないな。折角の修学旅行がこんなことになってしまっ

「いえ。いい経験になりましたし気にしないでいいですよ。できればその暖かい目で見えてくるのは止めてください」

「ふっ。良い兄ではないか」

「自慢の兄ですから。これからもお願いします」

「任された」

(素敵です。艦長)

(それ以上にダイスケ君が艦長の隣にいても違和感ないわね)

ダイスケは戦闘が良く見えるように艦長席の近くにいる。ハッキリ言って違和感がなく、指示されたら当然のように従ってしまうほど様になっていた。

「相良軍曹を発見しました！」

敵機を撃墜している中、宗介を発見した。

「よし！あれを発射しろ！」

「了解！」

宗介の位置に機体が発射された。艦長曰く宗介の新しい機体でミスリルからその機体で戦うよう依頼されていたようだ。宗介は早速

乗り込みAIが組み込まれていることに驚いている。

「はっはー！面白いじゃねえか、カシムウ！」

ガウルンは宗介の機体を見てラムダドライバを搭載していると見抜いたようだ。更にラムダドライバの出力を上昇する。

ガウルンの機体の出力の上昇に驚愕する面々だがダイスケは懐かしむような過去を思い出すような表情で見ている。

「ダイスケ君？」

ジェフリーはそんなダイスケを見て疑問を持つが戦闘中のこともあってすぐさま切り替える。

「さあ。終わりにしようぜカシムウ！」

ガウルンの攻撃が宗介の機体に直撃するが無傷だった。

「直撃したのに無傷とは相当固い機体じゃねえか！」

「見た目華奢なのに凄いな！」

「違う」

甲児とクルツの会話に否定するダイスケ。その言葉に動揺するも通信機からの千鳥の声に意識を戻される。

「ぶちかませー！ソースケー！」

「応ー」

千鳥の説明を聞いた宗介はパートナーを組んでいたキリコと全力の攻撃でガウルの機体にダメージを与えた。これからが本番ということだ。ガウルンが退く。

「おいおいおい。驚いたぜ。まさかダイスケ・カミシロがいるとはな」

ガウルンが相手に伝わるよう通信をオープンにして話始める。ガウルンの機体には相手の通信を傍聴する機械も組み込まれているらしい。それを自慢してきた。

「兄の方は注目されていないが弟の方は注目されているぜ。なんせあのラクナルド博士の正当後継者だ。うちの幹部からも狙われているからな。むしろ引き抜かれようと勧誘してくるかもな」

「なっ！」

「どっ！っ！っ！」

ダイスケが狙われていると聞き驚くアルトたち。

「ここでお前を倒せばその情報は伝わらないわけだ！」

「できるかな」

そう言ってガウルンは一目散に逃げていく。その速度にヒビキたちは追いつけないでいた。

「くそっ！」

「気にしないでいいよ。夜にヒビキも父さんと一緒に戦っていた人た

「ちは模擬戦相手じゃなくてああいう輩だし」

「そうだったのか!？」

ダイスケの言葉に本気で驚くヒビキ。その様子に甲児たちは何とも言えない表情になる。

「ありがとうね。あなたのお蔭でソースケは無謀な突撃をしなかった。あんたはソースケの生命の恩人だよ」

「あはは。照れますよ。……あ、入って来た」

マオがソースケのことでお礼を言うと甲児たちが入って来た。部隊に所属しているのを黙っていたことを謝りに来ている。ヒビキは落ち込みながら入ってきている。どうやら、夜な夜な父親と戦っていた人が襲撃者と気付かなかったことにショックを受けているようだ。

「ヒビキ君どうしたの？」

「以前の自分が鍛錬だと思って戦っていた者が実はダイスケを狙った襲撃者だと気付かなかったことにまだ落ち込んでいるらしい」

「ああ。ヒビキ君、結構ボンクラだからね……」

「ボンクラ……」

（気づけよ……）

（マジでボンクラだな……）

(ダイスケ曰く、父親に引き取られてから元気を取り戻して直ぐに襲撃されてたからいつもの習慣のようなものになっていたこともあるらしいけど……)

(可愛い……)

((((え…!)))

ヒビキの様子にスズネがポツリとつぶやいた言葉に戦慄していた。